

この世界はさまざまな物質で充たされている。宇宙にはポイドといってまったく無い空間があるにはあるが、それでもまんべんなく物質に充たされている。ダークマター、ダークエネルギーといった地球人を超えた物質も充滿している。地球の内も外も溢れんばかりの物質に充たされている。ちなみに人間の細胞は約37兆2000億個だという（60兆個だともいわれているが、それは雑な計算の結果）。この世界は「ある」に充たされているが、その「ある」の根源はなんなのか、紀元前のむかしから考えられてきた。

最初の哲学者といわれているタレスは万物の根源は水だと考えた。ヘラクレイトスは万物の根源は火だと考えた。エンペドクレスは万物の根源を、火・空気・水・土の四元だと考えた。デモクリトスは原子論を唱え、無数の原子（分割不可能な微小な物体）の集合と離散によって事物や事象を説明しようとした。そんなふうには「ある」の根源を思考してきたが、なぜ「ある」だけがあって「ない」はないのか、は考えられずにきた。

ライプニッツは「この世界はなぜ無ではなく、何かがあるのか。実際、何もなかったほうが、なにかあるよりも簡単で容易であるといえる」と言った。後年ハイデガーも「なぜ一体、存在者があるのか、そして、むしろ無があるのではないのか」これが第一の問いだと言っている。にもかかわらずライプニッツは神学を持ち出したし、ハイデガーも、その問いについては解答は不可能ではあるがこの根本的な謎と向き合うことが大切だ、と言っただけだ。ウイトゲンシュタインは「神秘的なのは世界におけるものごととのあり方ではなく世界が存在するそのこと

だ」と言った。

なぜ「わたし」は（世界は）存在しているのか、ということがわからなくても、「わたし」とは何なのか、ということがわからなくても、「わたし」は「わたし」という言葉を用いて暮らしている。この不思議さを不思議ともおもわない「わたしたち」が「わたし」を生きている。なぜ生きられるのか。最近そんな持もないことにとらわれている。

デカルトのように「わたしはほんとうに存在する。だが、どのようなものか？ わたしは答えた。考えるもの、と」とポイントを変えると、量子宇宙論の多世界解釈では、量子効果によって無数の宇宙（ひも理論では10の500乗）が生じ、そのひとつひとつで異なる現象が起きている、らしい。だから無の宇宙もあり、何かがある宇宙もあり、さまざまな宇宙がよりどりどりで、だという。でも、そういつてしまつたら身も蓋もないではないか、とおもってしまふし、それは物理的な現象のことをいっているだけで、形而上学的な「なぜ無ではなく、何かがあるのか」とは区別しなければならぬだろうが、「このような宇宙にいる」という安易な答をすこし魅力的におもっているほうが一方にはいる。

オッカムのカミソリの理論（ものごとをシンプルに捉える）からいうとこの世は「ない」であるほうが論理的なのだが、なぜ「ある」という不必要な「存在」をばくは生きているのだろう。考えていたら夜も眠られず、昼寝をするしかない。